

「家族」を問う

# 日本の家族を襲う危機と それへの免疫を鍛えつつある アメリカ家族

## 「生物学的家族」と「非生物学的家族」

普通の意味での「血縁的家族」について「生物学的家族」という言い方が前世紀後半から一般メディアでも使われ始めた。当然、現代社会において、グループ・ファミリーをはじめとして「非生物学的家族」の類型が増えてきたとする認識のゆえだった。

日本は、1億人以上の人口に対して在日外国人が220万人しかいないという、世界でも極めて特殊な国だから、「一国をあげて生物学的家族」というような錯覚がある。他方、アメリカは190を越える民族集団の寄り合い所帯だが、今日の世界では、むしろこちらのほうが普通だろう。

日本人が国境を越えるのは海外渡航しかないが、多民族社会では国内で日々国境を越える。人口はアメリカの15分の1以下でも、やはり190余の民族集団が住む小型の多

民族社会オーストラリアで、あるギリシヤ系少女は、自宅から大通りへ出るとき、「これから私はオーストラリア人よ」と言い聞かせ、多民族社会である学校では「オーストラリア人をやって」、帰路、自宅への路地の入口で「さあ、ここからはギリシヤ人よ」と言い聞かせたという。これこそが「内なる国際化」なのだ。

この基本構造の違いは、日米豪の家族の違いを決定的にするだろう。つまり、多民族社会では社会がすでに非生物学的家族なのだ。

## なぜ自分の子がいるのに 異民族子弟を養子にできるのか？

太古からの非生物学的家族は養子縁組による家族だが、前世紀後半からアメリカで目立つのは、実子がいるのに異人種の子供を養子にする鮮烈な慣習である。今回サンドラ・ブロックがオスカーを受賞した『しあわせの隠れ場所』も、白人家族が都心スラムの黒人青年を養子にしてアメフトのスター選手に育て上げたという実話をもとの作品で、この類型が使われている。オバマと大統領選を争った共和党のマケインも、アジア系の孤児を養女として実子とともに育て上げたが、2004年の大統領予備選ではブッシュ陣営から「不義

越智 道雄

Written by  
Michio Ochi

明治大学名誉教授



の子」との悪宣伝にさらされた。

日本人は、実子がいれば不幸な孤児を引き取る勇氣はない。他方、アメリカで最も生物的家族にこだわるヒスパニックは、よほどの事情がないかぎり、この型の養子縁組を家族への冒瀆と考える。先の映画の白人家族テューイ家もマケイン家もたまたまプロテスタントだが、キリスト教信仰が「勇氣」の根幹にある可能性が高い。一方、それに劣らずヒスパニックの生物的家族への信念には、カトリック信仰が裏打ちされている。映画『ミ・ファミリア』や『落ちこぼれの天使たち』はその参考になる。ハーバードに受かってからも親と別れたくないので、地元ロサンジェルの大学へ行くほどののだ。

大きく分けると、プロテスタントは、世間はもとより内面ですら罪を犯さないよう自己監視を怠らない「自力本願」型、カトリックは、罪は防げないから告解で免罪してもらおう「他力本願型」である。しかし、どちらの内面をも「神のまなざし」が貫いている。このまなざしは、近代化すれば「公」の概念へと通底する。したがって、非生物的家族、生物的家族を問わず、「公」の概念が浸透し、それが背骨を形作っている。

## 子殺しと仮想現実——間接性の病理

しかし、日本の家族には公概念が希薄だから問題だらけだということにはならない。過剰な公概念が生物的家族に入り込めば、弊害

を生む。かつての日本では、公概念が生物的家族を越えていた。例えば、家族より主君とか天皇が優位を占めていた。ヨーロッパでは、家族の一員が社会から指弾されれば家族は彼(彼女)を守ろうとしたが、日本では家族が先頭に立つて彼(彼女)を指弾した。また欧米では、教会、共同体、クラブその他が彼(彼女)を庇護してくれる。日本の過剰な公概念は、戦後の民主化によって瓦解した。それに代わる公概念を生み出すだけの民主主義の成熟は、特に都市部においては起きていない。従って、今日、「公」が希薄だから日本の家族は穏やかだとはならない。

現代の最大の問題は、各家族は生物的・非生物的を問わず、一個の「自然」として「高度管理社会」という「非自然」にさらされ、それに蝕まれているということだ。この種の社会こそ、私たちが今日どつぶり呑み込まれている社会で、その結果、ついに幾多の殺人、特に実の親による赤子殺しにまで病理が集約されてきたかのような観もある。問題は明白で、直接的な人間関係を厭い、インターネットや携帯で極力これらを間接化したあまり、自然としての他者(自分の赤子も含めて)への忍耐力が養われず、「きれる」現象が一般化した。つまり、動物が全て備えているはずの育児本能までが、この種の社会によって破壊されつつあるのだ。比較行動学では、野生動物の大半が同属は殺し合わないと言われ、ヒト、ノロジカ(バンビの種)、ハトなど、弱い

動物だけが同属で殺し合うという。現代の社会では、生物的家族同士まで(自分の赤子も含めて)群衆と同じに見える。そのくせ、見知らぬ相手とのチャットのほうが安心できる倒錯が起きているのではないか。

猛獣は全て同属で殺し合わないのに、ヒトをはじめ弱い動物に同属殺しの現象が見られる以上、同属殺しを封じられるだけの自発的な公概念を生み出せる成熟と強さを民主主義が獲得するしかない。それは学校と両親と共同体総がかりの難事業だ。ヒラリー・クリントンの著書、『村総がかり(イット・テイクス・ア・ヴィリッジ)』は、その主題である。

育児本能の破壊だけでもシニールなのに、「現実」は全てテレビその他の画像で提供される「仮想現実」と化した。稀に現実と接しても、画像のほうが「現実感」がある倒錯ぶりだ。つまり、私たちは人間関係の間接化によって現実から自分たちを間接化してしまったのである。孤立した自然体としての家族は、膨大な非自然の「人工社会」に包囲し尽くされているのだ。

## 家族のめざす正の方向と負の方向

私は、非生物的家族は高度管理社会による「間接性の病理」への楯だと考えている。その原型として、幾多の「目的共同体」、つまりコミュニティを日米で訪ね歩いてきた。今日、アメリカではこの種の共同体は数千に増えたが、日本ではそれほどでもない。社会的縛りの多

い日本では、さらに共同体で縛られることには拒絶反応があるからだろう。それに對して、個人の自由度が強く、それを抽象的な公概念が引きまとめている状況に疎外感を抱くアメリカ人の場合は、逆に「共同体ごと」が楽しいからだ。

ともかく、私は目的共同体の「育児棟」に特に注目した。子育てまっさかりの夫婦十数組が同一棟で暮らし、全ての子供が兄弟姉妹として非血縁の子供と交わり、上の子は下の子の面倒を見る。親たちは自分の子供ばかりか、非血縁の子供にも理由を説明して理非曲直を理解させる。つまり、躰をする。しかも、複数のおとなたちから違う躰けをされてとまどう子供には、親が世間には個々の問題について異なる見方があることまで説明する。そして、「おたがいの意見が異なることに同意する」(英語だと「アグリー・トゥ・ディスアグリー」という)覚悟を培うのだ。つまり、これこそが成熟した民主主義の基本となる。「あなたの意見には同意しかねるが、私はあなたがその意見を口にできる自由を守るためには命をかけてもいい」。民主主義の神髄はこれであることを、できるだけ早くから理解させる―そして

これこそ、「日々の国境越え」、「内なる国際化」のミニチュアとなる。これらが他者への忍耐力を鍛え上げるのだ。

この「日々の国境越え」は、ひとところの離婚ラッシュでアメリカに「ステップファミリー(継子継親家庭)」が増えたことにも起因したことだろう。子連れ同士の再婚家庭をこう呼ぶのである。

しかし、目的共同体は総じて白人主体で、冒頭のテューイ家とマケイン家のように異人種の子を白人家庭に引き取る方式には、「内なる国際化」の意味でも、私は強い感銘を受けた(しかも両例はともに、差別的な南部で差別を乗り越えた家庭なのだ)。残念ながらこのタイプの家庭はプライバシーゆえに取材が困難なのだが、アメリカが1990を越える民族集団からなる多民族社会で、次の大統領選(2012年)までには白人が少数派になる統計予測があり、私には異人種養子縁組は来るべき人口大逆転への叡知に起因しているとも思える。それをプロテスタントの神学概念、市民社会の公概念が後押ししているのだ。

むろん今日、オバマ大統領を攻撃する保守的な白人集団「ティー・パーティー」の活動は、

この統計予測への恐怖が動機になっている。深刻なのは、オバマに投票した白人の一部までが、最近この群れに身を投じていることだ(このねじれ現象は時事通信のウェーブマガ「ワシントン回廊」の拙連載参照)。

とはいえ、合衆国その他、世界の多民族社会がめざす方向こそ正の方向であり、日本の同質的家族を見舞いつつある危機は、この国の方向が負の方向へと固定されていることと無縁ではないだろう。

越智道雄 (おち・みちお)

明治大学名誉教授、城西国際大学大学院非常勤講師。1936年愛媛県生まれ。65年広島大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。66年玉川大学文学部助教授、70年明治大学商学部助教授、同教授を経て2007年定年退職。専門はアメリカ文化研究、多元国家アメリカ論、児童文学・ミステリ・SFの翻訳など多数の著作、翻訳がある。主な著書は、『孤立化する家族 アメリカン・ファミリーの過去 未来』(時事通信社)、『ワスプ(WASP)』(中公新書)、『ブッシュ家とケネディ家』(朝日選書)、『誰がオバマを大統領に選んだのか』(NTT出版)、『ビジュアル・アメリカ史』(東洋書林)など。